

O2-005

1歳児クラスの登園時の分離不安の傾向とその要因に関する考察—8ヶ月間の不安強度の測定と、保育者へのインタビューをもとに—

本岡 美保子

広島都市学園大学 子ども教育学部 子ども教育学科

**【背景と目的】**「乳児保育の一般化」から20年余りが経過する中、我が国の乳児保育の利用率は増加の一途をたどっている。この時期は情動調整の発達期であるため、子ども保育者ともに葛藤を抱えやすく（本岡 2019）、とりわけ登園時は、子ども、保育者、保護者の3者にとって、心理的にも肉体的にも負担の多い時間帯であるだろう。これまで幼児の登園時の分離不安に関しては、保育者の意識の違い（塩崎 2004）や、母親の対処行動（権田 2012）、保育者の配慮（山本・松葉 2012）などの研究の蓄積があるが、乳児保育における分離不安の研究は少ない。そうしたなか柴田（1985）は、分離不安強度の測定から、1歳台に不安が強く現れることや、母親の養育態度の影響があることを示した。しかしこの研究は、「乳児保育の一般化」以前のものであり、測定日数も少なく、母親の養育の影響以外の要因の検討もない。そこで本研究では、登園時の分離不安強度を8ヶ月間測定するとともに保育者へのインタビューを実施し、1歳児クラス全体の傾向を考察した。

**【方法】**H市Aこども園における1歳児クラスにおいて、5月から12月までの分離不安強度を測定するとともに、保育者へのインタビューや観察を実施した。分離不安強度は、柴田（1985）の直後不安尺度を改訂し、5段階で測定した。なおAこども園は、1歳児保育の適正と考えられる7人から12人（村上 2009）を満たすため、本研究の対象とした。

**【結果と考察】**5月の不安強度の平均値が最も高かった（2.50）ものの、9月（2.09）も年間平均値（1.92）より高く、10月（1.90）、11月（1.90）も比較的高い傾向が続いたことがわかった。最も不安が強い強度5の出現率も、5月（24.7%）が高かったが、10月（17.5%）と11月（20.6%）は年平均（14.8%）を上回っていたことがわかった。また保育者へのインタビューからは、9月に初めて子どもの入れ替わりがあつて以降、子どもの入れ替わりが続いたこと、また、後半になって不安強度が高くなった子どもの1人は、退園した園児との関係が強かったことなどが明らかとなった。こうしたことから、1歳児クラスの傾向として、年度当初にのみに分離不安が強く現れるのではなく、年度中盤から後半にかけても強く現れる可能性があると考えられ、子どもの入れ替わりの影響が強いことも推測される。（本研究は、JSPS 科研費研究活動スタート支援（課題番号 19K23356）の助成を受けた。）